

キャリアイベントに関する学生の意識

——アンケートおよび終了後の座談会から——

創生ジャーナル Human and Society 編集委員会

はじめに

2018年2月10日に、「女性も男性も、ともに自分らしく働くには」と題したイベントが開催された（創生ジャーナル Human and Society 編集委員会, 2018）。今回のイベントは、教員のみが企画・運営するのではなく、学生キャリア研究会メンバー（以下、学生メンバーとする）が、企画から、広報、当日の運営まで深く関わっていた。

なお、学生メンバーは、全員が新潟大学創生学部の1年生（創生学部1期生）であり、このような枠組みでイベントを企画・運営するのは初めての経験でもあった。また、彼らは、主体的に今回のイベントに参加してはいるものの、興味・関心や問題意識が必ずしも全員で一致しているわけではなく、イベントのテーマである「キャリア」や「働くこと」をどの程度身近な問題として捉えているかにも大きな個人差があったと考えられる。そのため、ともすれば、イベントを無事に開催することだけに意識が向いてしまい、せっかく企画に参加しているものの、自身の持つ関心や問題意識を十分に反映できなくなることも予想された。

そこで、単にイベントを運営するだけでなく、学生メンバー一人ひとりがイベントを通してキャリアに関する理解を深められるように、教員側からの働きかけを行うことを試みた。具体的には「事前・事後アンケート」の形で、学生メンバーに自身の考えを書き出してもらい機会を設けるとともに、終了後に座談会の形で、経験したことを共有する機会を設けた。これらの試みについての定量的な評価は難しいものの、一人ひとりが「キャリア」について考える機会にはなかったのではないかと推察される。

このように、実施されたアンケートや座談会自体は、あくまでも学生メンバーの振り返り等を促す試みであったものの、そこで表現された内容は、「キャリア」やこういったイベントに対する学生の意識を知る上で、

Table1 働くことに関する問題意識に関する記述

ID	記述の概要
1	育児休暇の取得 長時間労働 残業 女性の社会的活躍度の低さ 女性管理職や女性社長の少なさ ロボットやAI
2	ブラック企業、過労問題 賃金格差 有給の未消化問題 出産・育児休暇によるキャリアの中断
3	育児によるキャリアの中断 保育所 育休からの仕事復帰 長時間労働 過労死
4	男女の賃金格差 女性の出産後の継続的な就業
5	働くことに対する意識の変化
6	長時間労働 賃金格差 育休・産休の制度 保育士や介護士の不足
7	過労死 ブラック企業 男女不平等 育休取得率低 仕事と育児の難しさ

貴重な資料となりうるものでもある。すなわち、現在1年生である彼らが、キャリアや働くことについてどのような認識をしているのか、そして、このようなイベントを通して、具体的にどのようなことを考えたのかなどを知る上で重要な資料となりうると思われる。これらは、今後大学1年生向けのキャリア教育を設計

Table2 自分の将来に関わる関心や不安 に関する記述

ID	記述の概要
1	社会で活躍できる（ロボットでは代替不可な）人材とは何か 社会で活躍できる人材になるために必要な能力は何か
2	女性管理職の人数が極端に少ない社会で、どのような問題（弊害）が生じるのか 管理職や国会議員の適切な男女比率
3	男女が平等に働くことができる社会を作るには具体的にどのようなことが必要か 自分が企業に就職したときに、女性でもキャリアを上げていくことができるか
4	企業は男女が働きやすい環境のために、現状をどのように変えようと考えているのか
5	自分が就職する時期の景気と自分の就職
6	電子化や機械化、AIの発達によって生じる人間の労働力の必要性低下 グローバル化で、実際必要な語学力 ニュースではなく、現場で今問題になっていること
7	地域づくり、行政、国際（多文化交流、言語） 自分の就きたい職場（仕事）に就職できるかどうか 奨学金返済、仕事とプライベートの両立（女性の立場からの）

したり、イベントを計画したりする上でも、有益な情報であると言えるだろう。そこで、本稿では、今回行われたアンケートや座談会の内容の一部を整理し、学生の意識について検討を行った結果を報告することとする。

アンケート

方法

学生メンバー7名（男性3名、女性4名）に対して、イベント実施前後にアンケート調査を実施した。事前アンケートは1月下旬に、事後アンケートはイベント当日の終了後に、それぞれ実施された。

事前アンケートは1) 一般に「働く」ということに関して、今どんなことが問題になっていると感じているか、2) 自分の将来とのかかわりで、どんなことに関心や不安があるか、3) 今回のイベントにどんなことを期待しているかの3問で構成されていた。事後アンケートは事前アンケートと同一の1)2)の質問の後に、4) 今回のイベントを通じてどんなことが勉強になったと感じているかを問う3つの質問から構成されていた。いずれのアンケートも、A4用紙1枚に印刷されており、回答は枠内に自由に記述する形であった。

結果と考察

ここでは、イベントの前の時点で、学生がどのような意識で臨んでいたかを示すために、まず事前アンケート1), 2), 3)の問いの回答について検討した。また、イベント後に学生がイベントを通して何を学んだ

と認識しているのかを検討するために、事後アンケートの4)の問いについて整理を行った。なお、事後アンケートの1) 2)の回答については、本文では直接言及せず、資料の形で添付した。

1) 「働く」ことに関する問題意識 「働く」ということに関して、どのようなことが問題になっていると感じているかを問う1)の問いについて、検討を行った。回答内容で、多く見られたのは、「海外に比べて育児休暇が取りづらいこと」や「出産・育児による休暇によってキャリアが中断してしまう恐れがあること」など、出産・育児に関することで、7名中6名の記述に見られた。また、「労働時間が長く、残業をするのが当たり前のようにになっていること」や「過労死、ブラック企業」など、労働時間の長さに関する問題を挙げていた人も6名と多かった。出産・育児に関することが多く挙げられていたのは、今回参加した学生メンバーに創生学部の授業（基礎ゼミII）において女性のキャリアをテーマとして扱った学生が多く含まれており、今回のイベント自体もそれを意識した形で当初の設計がなされていたことも影響していると考えられる。その他、7名が記述した内容について、簡単にまとめた概要をTable1に示した。

2) 自分の将来に関わる関心や不安 次に、自分の将来に関わる関心や不安についての回答の概要をTable2にまとめた。「ロボットでは代替不可能であり、社会で活躍できる人材とは何か」や「グローバル化といわれているが、実際にどれくらいの英語力（語学力）が必要

Table3 今回のイベントに期待すること

ID	記述
1	将来、自分が働くときに働きやすい環境で働けるようにするためには何が必要なのか、どうすればよいのかを考えるきっかけを得ること。(働きやすい環境とは何かも考えたい)
2	実社会で活躍している方に直接、職業、社会の実情等についてお話を伺ったり、質問にお答えしたりしてもらうことで自身の持つ職業や社会に対するイメージが鮮明になることを期待している。男女平等参画社会の実現には何が必要なのか、また、現在は何が不足しているのかについての意見を得られることを期待している。
3	女性が生き生きと働いている姿や、女性の働き方を変えていくために議員として行っていることを知って、自分のキャリアに対する考えを深めることができたらいいと思っています。
4	海外と日本の「働く」という環境や状況について比較または知ること。
5	女性が活躍する社会の実現には、男性の支援が不可欠である。女性側から、現在の「イクメン」などの取り組みについてのお話を聞くことで、将来のために、自分の意識を変える一助にしたい。
6	海外との関わりや、英語の必要性が知りたい。建設業では、電子化・自動化がどれくらい行われているのか。実際に働くことのイメージがまだまだできていないので、仕事観を参考にしたい。
7	まだ、女性が仕事で活躍できていなかったり、育児などのプライベートとの両立が難しいという状況で、男性社会といわれている建設コンサルタント社長や地方議員として活躍しているお2人と対話し、具体的に将来どのような社会を目指していけるのかというイメージ（政策）を共有したい。

なのか」など、社会に必要とされる人材像や必要とされる能力に関する関心や不安が挙げられていた。

既述の通り、学生メンバーは全員が1年生ということもあり、具体性の高い記述は多くなかったと言える。しかし、社会で何が必要とされているのか、という点については強く意識していることが窺えた。

3) イベントに期待すること Table3 に、今回のイベントに期待することについての記述をそのまま掲載した。ここで多く記述されていたのは、1) や2) の間で挙げられていた内容について知ることであったと言えるだろう。

今回の1)～3)の一連の問いは、イベントの企画において学生メンバーの問題意識を明確化することを意図していたが、それが一定程度できていたのではないかと推察される。「建設業では、電子化・自動化がどれくらい行われているのか」「海外と日本の『働く』という環境や状況について比較」など、必ずしも今回のイベントであまり扱われなかった内容についての記述も見られていたが、そういった点をイベントにどう反映させていくのかは、今後の課題であると言える。

4) イベントを通して勉強になったこと Table4 は、事後アンケートにおいて、イベントを通して勉強になったこととして記述されていた内容である。ここで複数の学生に共通して見られた内容は、「ワークライフバランスではなく、ライフの一部にワークがあること。」など、イベントの中で株式会社キタックの中山氏が言及していた点についての記述であった。

これは、本来は「ワーク」や「ファミリー」「ホビー」など様々なものを包括して「ライフ」が構成されるはずであるにもかかわらず、一要素であるはずの「ワーク」と、「ライフ」のバランスを論じるのには違和感があるとの指摘である。この点について挙げていたのは7名中3名であった。「ワーク・ライフ・バランス」は、政府の取り組みとして「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」が2007年に策定されるなど、「働き方」を考える上で実現すべきものとして扱われることの多い概念であると言える（内閣府 男女共同参画局 仕事と生活の調和推進室、2008）。その概念について、疑問を呈する指摘は、学生にとって新たな気づきにつながるものであったことが示唆される。

Table4 今回のイベントで勉強になったこと

ID	記述
1	男女がともに自分らしく働くことはあたりまえのことであるはずなのにできていない。 ワークライフバランスではなく、ライフの一部にワークがあること。 介護支援の仕組みを早急に整える必要がある。(在宅勤務とか) 男女ともに自立することが大切。一人で生きていく力を身につけておくべき。
2	企業と行政の面からみた働き方について考えることができた。 今後必要となってくる(大学で学ぶべきこと)事項のイメージができた。
3	今まで知らなかったことを行政面や企業面の2つの面からみることができてとても知識を増やすことができた。また、ゲストのお二人が歴史を学んだ方が良いとおっしゃっていたので参考になりました。
4	実際に社会で活躍してるお二方の講話を聞いたことでより女性が働きにくいという問題について現実味が出た。 また、性別で問題を分けるのではなく人として働きやすい環境を追求していくのが今後重要になると感じた。
5	上記のコミュニケーション不足の問題を解決することが重要であるを知って、これは「はたらき方」に限らず、日常生活全てにおいても、様々な問題を解決する上で大切だと感じた。
6	ワークライフバランスが古い。ライフあってこそそのワークである。 挑戦すること。在宅勤務など、働きやすいようにする取り組みをしているところがある。 いまだに男女格差があること。
7	ワーク in ライフ (ワークライフバランスではない。)

座談会

次に、イベント終了後の座談会で語られた内容について検討を行った。座談会は、学生と教員で、イベントの振り返りを行うという形式で、議題や進行役等は特に定めず、適宜教員が問を発するような形で実施された。参加者は、学生メンバー7名と教員6名であった。なお、発言の内容は、参加者の承諾を得た上で、ICレコーダーによって記録された。以下、文字起こしを行ったものをもとに、検討を行った。

イベントの進行について

座談会では、まずイベントの運営・進行についての反省が語られた。「今回、失敗したと思ったことは」という教員の問いかけに対して、学生からは以下のように、時間配分についての発言がなされていた¹。

a: グループワークがまとまらなかったですね。時間足りなかったな、普通に。もうちょい欲しかった。

b: 全体的に足りなかったかもと思った。

c: あと、グループワークのスタイルをもうちょっと考えたほうがいいのかと思って。あれだと時間的に足りないから、あの時間でやるんだったら、内容を変えなきゃかなと思って。ジャンル分けは別にしなくてもいいのかなと思ってたところかな。時間を延ばせば解決なんだけど、いまの時間のままだったらスタイルを変えないと、絶対またぶれるだろうなとは思った。

(中略)

d: 盛り上がってくれてよかったけど。

c: 2周目に入るところで、たぶん盛り上がったので、もっと1周目を早くして、2周目できるスタイルにしたいなと思って。人が貼ったのを見て、これどうだよねっていう話が一番盛り上がったように感じたので、そこをもっと時間を取りたかったなと思いました。なんか盛り上がってきた頃に切っちゃった感あるんだけど、どうでした？やっててどんな感じだった？

¹ 文字起こし部分は斜体で表現した。また、文頭のA~Fは教員、a~fは学生メンバーを表している。なお、参加者には、事前に座談会の内

容について論文や報告書等に記載することがある旨の説明を行い、承諾を得ている。

d:盛り上がったね

e:盛り上がったし、ある程度最後までまとまったような感じがしたので、あの感じでもいいのかなと少し思うけど、やっぱり時間が短かったような感じもちよつと。でも、どんなに時間とつてもたぶん盛り上がりちゃって、絶対に延びるから。

今回のようなイベントを行う際に、時間的な枠組みを意識しながら進めることの難しさが1つの課題として認識されたことが示唆される。また、講演に対する質問があまり出せなかったという点も、反省点として挙げられていた。

d:でもちゃんと考えて質問すればよかったなっけきょう思った。(中略)でも打ち合わせ的には、もうちょつと質問がある予定だったよね

c:予定だった。あれ?みたいな。X(参加学生)が察して手を挙げてくれて助かったけど。

f:ああ、そうなんだ。察してたの。

c:だって、明らかに目が合ったもん。挙げてくれるなと思って、スツと挙がったからありがとうという感じだけど、あれが学部の人だから分かってやってくれるけど、もうちょつと欲しかったなというところではあります。

g:質問自体の時間もなかったよね、あまり。

c:なかったね。3つ行こうかなと思ってたから、もう1つぐらい欲しかった。

f:上森さん(に対する質問が)、できなかったから。

c:そうそう、そうそう。

最後の、質問が一方の講演者に対するものに偏ってしまったという点については、以下のように資料の有無が影響したのではないかという考察もなされていた。

f:資料がある分、やっぱり中山さんのほうにいつちやうとか。

c:それはそうかもね。「ここ気になるんですけど」って言いやすいからね、資料あるほうが。

d:あんまりその場で考えても出ない。なるほどと思っちゃって。

これに対して、教員側から「事前に資料とか送っていただかなくて、どうしたら質問とか出ると思う?」という問いかけがなされた。これには、以下のように事前の準備の重要性を指摘するやり取りが続いた。

d:こっちは鍛えるしかない。

b:相手が何を話すか分かってたら、先に勉強する。しておけば、思ってたのと違うこと言ったら質問できるけど。

f:講演で初めて知識を何か知ったときに質問しづらいというか。

c:そうだね

A:ただ、ホームページの資料はあったんだよね。

f:それを最初にまとめたじゃん。調べて、質問とかあったという1回目か2回目のミーティングで出したけど、それも挙がらなかったよね。

c:それも挙がらなかったなと思って。それは聞いてほしかったなと思ってた。

d:流した。ごめんなさい。

c:もうちょつとやるとけばよかったな。

e:完全に忘れてた。

c:第2回目を見直してねって言えばよかったねと。

A:司会って、ただ出てくるものの交通整理をするだけじゃなくて、(質問が)出なかったときに自分は必ず一つ持ってる。

c:持ってたんですけど、それも中山さん(への質問)だったから、本当に上森さん(への質問)欲しいなと思って。そこはちゃんとこっちで根回ししておかなきゃだったなとは思いましたね。第2回(のミーティング)か何かのホワイトボードのやつを言ってるって、ちゃんとみんなの前で言えばよかったなと思いました。

a:なんか文にしてほしい、それを。

d:結構最後のほう、文にしないもんね。だいたい口で終わったじゃん。何かこれやろうみたいな。

c:うん。これやって、みたいな。

また、教員から事前・事後アンケートも踏まえて、イベント前後で考えが変わったことなどはないかとの問いかけがあった。それに対しては、以下のような発言がなされていた。やや長くなるがそのまま掲載する。

a:内容の面で言えば、いままでの会社の子育て支援とかは、ある程度聞いたりして、やってるんだなあとは思ってたんですけど、会社の介護の支援っていう観点を聞いて、そういうこともやっぱり今後考えていけないといけないんだなって少し思いました。

b:私はゼミで日本の育児休暇とかスウェーデンとかを

比較していたからか分からないんですけども、やっぱり日本って進んでないのかなというイメージが強かったのですが、たとえば中山さんの話とかを聞くと、企業の中でもちゃんと整備が進んでるし、2007年ぐらいから日本の社会、やさしくなったみたいな言葉が聞けて、自分の視点からしか見ていないということを、改めて分かったかなって思いました。

c: 聞いていて感じたのは、ずっと男女がなんちゃらという話が結構出ていた中で、僕は逆もあるんじゃないかっていうのを思っていて。男性が働きにくいということもあるのかなと思いつつ今日来たんですけど、あのお二人は、女性が働きにくだけじゃなくて、お互いに、という視点をお持ちの方たちだったので、やっぱりそういう人も世の中にはいるのだなと感じて。それとまたちょっとずれるんですけど、介護のほうには全然意識が行ってなかったの、確かなあというのはいくらも感じました。

それと、僕は時々海外とかって言うんですけど、海外はやっぱり実力主義なんだなということを感じて、上森さんの話で感じて、実力的にある人はすごく魅力なんだろうけど、そういう意味で日本企業というのはやさしいというか、すぐ首にしないという面では、日本企業というのはやさしいんだなというのを実感しました。あと中山さんが結構社員のことを、すごく手厚くというか、大事に思っているのを感じたので、やはりこういうところが日本企業のいいところなのかなというのは、実際に聞いていて感じました。

e: 僕が思ったのは、こういう講演会全般にも言えるんですけど、やはり意識が強まるということだと思うんですけど、ただ本を読んだり、ネットの記事を見たりするだけじゃなくて、直接人の話を聞いて、きょうのグループワークもそうなんですけど、自分自身で考えるというのは、認識を強める上でもそうですし、きょうの話だけではたぶん働き方の全部を知ったわけでもないですし、ほんの一部を一瞬知っただけみたいな感じなので、これからどう学んでいくかとか、これから繋げるやり方を考えていきたいなと思いました。以上です。

b: 一番今日の講演を聴いて印象に残ったのは中山さんの…。ワーク・ライフ・バランスじゃなくて…。違う、ライフの一部がワーク。

c: 合ってる、合ってる。

b: それに「すごい、そうだな」と思って、ワーク・ラ

イフ・バランスって言うと、ワークとライフが同じくらいみたいなイメージがあったんですけど、ワークよりライフのほうが大事だよなと思って、今の社会だとすごいみんなワークに気を取られすぎているというか、仕事に振り回されてる感があるんじゃないかなと何となく思って、何て言うんだろうな。まとまらないんですけど、何だろう。まとまらないです(笑)。

そうだなと思ったんですけど、もう一つが今回は割と女性が働きやすいというほうが、ちょっと強いというか、女性目線の意見というか、二人ともスピーカーの方も女性だったし、女性目線での話を聞いたんですけど、男性目線も知りたいなと思って、グループワークのときにも聞いたんですけど、企業の中で男性が多い企業もあれば、女性が多い企業もあるから、たとえば保育士とか女性が多いじゃないですか。その中で、男性の保育士の人とかは働きづらいのかなとか、そういうのも知りたいなと思いました。以上です。

d: ゼミで女性の働きやすさについてやっていたけど、今まで自分がそういう、女性だから辞めたほうがいいよとかいう扱いをされたことがなかったから、実感がなかったけど、今日話を聞いて、結構激しく2人とも非難(されることが多い)というか、(ひどい)扱いを受けていたから、本当に実際に社会でこういうふうな扱われているんだなということを実感したのと、グループワークで、K先生が、社会経験が豊富というか、すごい結構深いことを言っていて。普段接している人でもグループワークをすると、経験があるんだというのを(知ることができて)すごい新鮮な気持ちになったというのがありました。

また、最後にあらためて教員側から、今回やってみての率直な感想を出すように問いかけたところ、以下のような発言がなされた。いずれもイベント運営や、自分自身に対する気づきなどを含んだものであり、今回のイベントを通して学生が様々なことを考えることができていたことが示唆される。

e: 思ったより自分の思った通りにはいかないなと。

B: アドリブを効かせないといけないところがあった?

e: そういうわけではないんですけど、何でもないです(笑)。思い通りにいかないことが多いなって。

B：ああ、なるほどね

(中略)

a：そうですね、このイベントが決まってから、このイベントのために毎日いろいろ考えて頑張ってきました、と言えは嘘になるんですけど(笑)。僕、モチベーションの波が激しくて、やる気があるときはよしやるぞってなるんですけど、自分を四字熟語で表すとしたら三日坊主なので。(中略) こうずっとイベントに対してやる気を持って計画的に取り組むというのが、やはり大事なんだと思いました。最後バタバタしちゃった部分もあるので、交渉係としても、はい、以上です。

B：ありがとう。

c：今回思ったのが、集まる回数が多くて、しかも昼休みだったのが、最後まで決められずに終わって、じゃあ、それ次、あした来ようかみたいな感じになってしまうので、頻度が多くてすごかつらかった。そこがつかかったです、会の何かというよりも。なので、時間に余裕を持った時間に集まれるといいなとは思っています。

先ほどeくんが言っていたんですけど、各部門ごとの代表をみたいなのをつかって、代表だけで集まるみたいな感じにすれば、みんなで集まる時間が減るのかな。時間的拘束が長かったかなと思います。

あと企画がきちきちで、急ピッチだったので、それもあってちょっと負担になったのかなとは思っています。結構来るのも大変です。そう考えると、あまり休まる時間がなくて大変だったなっていうのは感じます。

B：現実イベントをやってみて、自分たちなりの働き方改革という必要性を感じたんだ。

c：そうです。これに追われてたんです。

B：なかなかみんな時間に一緒になるあれがなくて、昼休みの限られた時間でなかなか話が進まないみたいなことで、じゃあ、どうやったらいいんだろうっていうことで、その辺ちょっとパートごとに分かれて集まってとか、あとはLINEとか、情報共有する手段を駆使して、離れていても作業が進むようにする方法をどうすればいいんだろう。

c：それは思いました。

B：もうちょっと工夫していくと、今回の更なる実践向きになるというか、感じがしておもしろいかなと。

c：そういうことですね。仕事改革みたいな感じのことを少し感じていました。自分たちが忙しいんじゃないかと思ってしまったところがありますね。そんな

感じですよ。

d：広報としては準備期間が短くて、最初からあまりちゃんと広報をできなかったのが駄目だったなと思ったのと、個人的には自分がふんわりしていて、ちゃんと全体を細かく把握していないので、口で言われても、自分がふんわりしてるから理解できなくて、ちゃんと自分は把握してないけど大丈夫かなという気持ちのまま、今日まで来たのはいけんかったかなと。それは後悔ですね。ちゃんとやってくれる人が周りにいたので助かった。

b：実際それだよ。

d：すまん、すまんって感じでした。

g：私はこういう企画を運営する側もそうなんですけど、参加するのもしままであまりしてなくて。だから、初めて運営する側になってみたんですけど、細かいところ、実際やらないと分からないところが多いので、そういったところは、こういった経験を積んで行かなくちゃいけないと思ったし、こういう企画を通して、たぶん初めて知る一面とかが出てくると思うので、そういうのはいい経験になったと思います。

b：私は広報の係として、チラシをつくらしたり、レジュメをつくらしたりしたんですけど、広報の期間がすごく短くて、チラシを貼ったのも、当日の1週間前ぐらいからとかだったので、全然誰もメール来ないし、駄目じゃんってすごい思ってたんですけど。やっぱりもうちょっとコンセプトとか、企画を最初にしっかり早い段階でつくっておくのが必要だったなと思っています。

あとは、私の性格がすごく内向的というか、すごい消極的なので、こういう研究会とか絶対に参加しない性格なんですけど、今もそうなんですけど、やっぱり大学、創生学部に入ったんだし、もうちょっと積極的になろうと思って、過酷な環境に身を置こうと思って(笑)。過酷というか、何て言うんだろう。もっと意識高くなろうと思って入って見たんですけど、結構なんか楽しかったです。チラシづくりがすごい好きでした。楽しかったです。

B：でもなんか、それはすごく伝わりました。チラシの出来上がりもすごく早く出てくるし、すごく綺麗に出来てくる。あと修正もすごくいいから、たぶんbさんノリノリでやってるなと(笑)。

b：パソコンの前でずっとLINE待ってて、すごい楽しかったんで、ちょっとこれは続けたいなって思いました。

g：広報の時間とか結構短くて、3人であまり集まる機

会もなく、結構2人にお任せしちゃうことが多くて、そこは本当に申し訳ないなという気持ちと、自分のやっぱり積極的なほうじゃないので、自分の意見があまり言えなかったとか、そういうのが結構あって申し訳ないなという気持ちがありました。また今後やるという機会があったら、もうちょっとしっかり考えて、計画的にやっていきたいなと思いました。

まとめ

今回は、事前・事後アンケートと、座談会の内容を紹介することで、学生がイベントを通してどのようなことを考えたのかについて整理した。いずれも客観的なデータとしては不十分なものではあるが、今後教育・研究を進めて行く上での、1つの資料として活用できる部分もあるのではないかと考えられる。

引用文献

- 内閣府 男女共同参画局 仕事と生活の調和推進室 (2008). 仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) 憲章 「仕事と生活の調和」推進サイトワーク・ライフ・バランスの実現に向けて http://www.cao.go.jp/wlb/government/20barrier_html/20html/charter.html (2018年3月10日)
- 創生ジャーナル Human and Society 編集委員会 (2018). キャリアイベント実施報告—「女性も男性も、ともに自分らしく働くには」 創生ジャーナル Human and Society, 1, 7-18.

資料1 働くことに関する問題意識に関する記述（事後アンケート）

ID	記述
1	女性の社会的地位が低い。長時間労働。 子育てしながら働きにくい。
2	管理職の男女比の偏り。 職業についての偏見（〇〇という職業は男性(女性)のものである等） 労働時間の長さ，柔軟性の低さ。
3	男性も女性と共に家事・育児をするべきなのに男性が育休を取れる環境にあまりなっていないこと。 また，粘土層の上司たちが，女性に対して雑な扱いをしたり，優しくしすぎたりなど，平等になっていないこと。「どうせ女性だから」とか「女は黙ってる」というような男女の性別に関する固定観念が今でもあること。
4	「男」「女」と性別で分けるのではなく人として当たり前働きにくいということ。
5	コミュニケーション不足が何においても重要であると感じる。 行政と企業 企業の中での世代間 etc.
6	育児のみならず，介護にも理解が必要。女性が働き続けにくい（産休や昇進）。 長時間労働。休暇をとりにくい。改革や新しいものを嫌う傾向がある。
7	固定概念。支援不足。給料が上がらない。

資料2 自分の将来に関わる関心や不安に関する記述（事後アンケート）

ID	記述
1	出産してから復帰しづらいこと。 出産や子育てに関する男性の理解が不十分なこと。 就職時に職場環境を見極められるか。
2	（男女協調の面で）閉塞的な日本社会が今後どのように変化していくのか。（していないのか） 社会に対して自身がどのような形で貢献していけるのか
3	自分が将来就職したときに子育てをしながら仕事ができるのかということに不安がある。また関心があることは育休取得率をあげることについてである。
4	企業に入るのか，公務員になるか迷っている。自分の働く姿のイメージ化があまりできない。
5	自分の中に染みついた意識，偏見（男性は男性らしく，女性は～）などをリセットし，「はたらく」ことができるのかどうか。
6	どこまで機械化，AI化されるか。グローバル化により，言語力がどれほど必要か。 上司の考え方がどうか。
7	行政と企業で協力し合える関係に。 年代が異なる世代との交流，関係性。